特集I

入試から英語をはずすと授業は変わるか
――授業研究に基づいて予測する――

渡部良典

はじめに

大学入学試験から英語がなくなるとどうなるのか予測してみたい。この分野ではすでに多くの議論がなされてきており，「意見」はあらかた出つくした感がある。ここに新たな意見を述べてもまたひとつのヴァリエーションを添えるにすぎないであろう。そこで，本稿では私の行った実証研究の一部を紹介し，そのデータに基づいて予測を行うことにする。したがって，自分でどう「思うか」ではなく，この調査から得られた「客観的な情報」から言えることだけに焦点を絞る。また，対象は教室内で行われている授業についてのみ扱う。教室外の現象「出版物（参考書）の内容」，あるいは教育の比較的マクロな側面「学校のカリキュラムがどう変わるか」などについても扱わない。すなわち，焦点はあくまで「授業」特に「教師」におき，入試から英語がなくなれば教授法は変わるのか，もし変わるとすればどのように変わるのか，をできるだけ客観的に記述することを趣旨とする。

なお，「受験生」の学力，学習態度なども重要なテーマである。しかし，この分野に関して予測を行うにはあまりにも実証データが少ない。本稿ではこれまでに得られた数少ない調査報告を基に，最後に簡単に触れるのみとする。

入試の影響とは

「入試から英語をはずすべし」との主張の背景にはどのようなシナリオがあるのだろうか。つまり，入試から英語をはずすと，具体的には英語教育がどのようになると描かれているのか，寡聞にして正式に発表されているのを知らない。しかし，少なくとも以下の論理に基づいているのは確かであるように思われる。

1. 現在行われている英語教育は「実用英語」の点からして望ましくない。
2. 入試があり，それが最大障害となっているからである。
3. したがって，入試から英語をなくせば，障害は消え去り，
4. 英語教育は向上し，「実用英語」を重視した方向に向かう。

本稿では上記1から3までの前提の妥当性を検証する。本文に詳述するように「これらは誤りである」というのが結論なので，4については特に扱わない。それでは具体的にどうすれば英語教育は向上するか，これについては別の機会に述べたことがあるのでここではあえて繰り返さない（Watanabe, in press a 参照）。

調査を始めるにあたり，まず初めに一般にいわれる入試の影響とはどのようなものかをまとめることにした。出典は大学生，高校生，高校の先生方，予備校の先生方とのインタビュー，そして，新聞，週刊誌，テレビ等マスメディアで報道された受験関係の資料，などである。以下にそのうちの代表的な7項目を挙げた。

1. 受験技術を重視する
2. 文法訳読法に頼り過ぎる
3. 英語の形式的側面の説明に重点をおく
4. 英語の音声的側面を軽視する
5. 日本語を使い過ぎる
6. 先生が一方的に教える，など，限られた範囲の授業形態だけが行われる（グループワーク，ペアワークなどが軽視される）
7. 授業内容は無味乾燥である

入試英語廃止論では「入試がなくなればこれらの傾向は是正され，より『実用的な』英語を目指した教育に向かう」ことが前提とされている，と仮定する。本文中「影響」あるいは「受験教育の特徴」といった場合，特に上に挙げたものをさすものとする。

以下，まず初めに「上記の記述は果たして本当に『入試準備教育』の特徴を表わしているか」を検証する。次に，「通常の授業」の観察結果との比較をもとに「入試がなければそのような好ましくない傾向は是正されるのか」を予測してみたい。

調査の内容と手順

調査は1994（平成6）年から1995（平成7）年にかけて行われた。協力いただいたのは地方の県立高校2校(HA, HB)，及び東京の私立高校1校（HC）である。いずれもいわゆる進学校であり，毎年生徒のほぼ100%が進学し，有名私立大学あるいは近県の国公立大学をターゲットとしている。合計5人の先生の協力を得，それぞれ「受験準備特別授業」と文部省カリキュラムに基づいた「通常の授業」を観察対象とした。（以下先生方は匿名，敬称は略し，TA, TB, TC, TE, TF で示す。）このうち TB だけは2年生のクラス担当，他はすべて3年生のクラスである。時期は6月から7月。入試までにはまだ半年ほど間があった。TB はまだ特に入試を意識しているわけではなかった。また他の3年生担当の先生方も入試準備は2学期，9月から始めるとのことであった。クラスサイズは平均30名から40名ほどである。

調査は，予備校，高校を含め，合計50時間ほどにわたった。本稿ではスペースの関係上，そのうち，約11時間の高校の観察のみを扱う。内訳は表1に示した。

授業観察に基づいたデータ収集及び分析統合の経緯はおおよそ以下の通りである。それぞれのクラスに生徒の一人として参加し，観察用紙に授業内容を記録する。同時にテープに収録する。その後，先にまとめた一般の意見を具体化するため授業記録を分析しカテゴリーを抽出する。それをもとにコーディングシートを作成し，テープを聴きながらこのシートに頻度あるいは継続時間を記入する。

表1：観察時間　（単位は「分」）

高校	HA		HB	HC		合計
先生	TA	TB	TC	TE	TF	
受験準備特別授業	79	67	80	47	48	321
通常の授業	79	57	98	47	50	331
合計	158	124	178	94	98	652

カテゴリーは全部で60にも及んだため本稿ではいくつか全体の傾向をよく表わしているもののみを扱う（コーディングシートについては Watanabe (in press b) を参照)。以下かぎカッコ内は，授業観察のデータから導き出したもののうち，先に挙げた意見を検証するために有効と見なされたカテゴリーである。

1. 受験技術を重視する
   「試験への言及」（入試が話題になった頻度。例えば，多岐選択問題を効率よく答えるためのヒントを与える，将来の問題を予測する，時間配分などについてアドバイスを与える，等）
2. 文法訳読法に頼る
   (1) 「文法用語」（「主語」「動詞」「不定詞」等，の使用頻度）
   (2) 「翻訳」（句，節，文レベルで行われた翻訳の頻度。単語に日本語相当語句を与えるなどは含めていない）
3. 英語の形式的側面の説明に重点をおく
   (1) 「先生が生徒の発話に対して行ったフィードバック」（文法上の誤りの訂正の頻度）
   (2) 「英語の構造についての説明」（文の書き換え等について行われた説明の頻度）
4. 英語の音声的側面を軽視する
   (1) 「リスニング練習」（リスニング教材を使った練習の継続時間（分））
   (2) 「英語の音声機械的練習」（パターンプラクティスなど，英語の音声の形式的練習。語，句，節，文レベルの発話の頻度）
5. 日本語を使い過ぎる
   「指示，説明など実際の情報伝達に使われた発話」（語，句，節，文，文章レベルの英語，日本語による発話の頻度）
6. 先生が一方的に教えるなど，限られた範囲の授業形態だけが行われる（グループワーク，ペアワークなどが軽視される）
   「授業形態」（「講義形式（先生が教卓に立ち生徒を指名するなどしてすすめる形態)」「ペアワーク」「グループワーク」「生徒の口頭発表」「個人の作業(生徒が自分の席で与えられた練習問題に取り組む)」，それぞれの継続時間（分））
7. 授業内容は無味乾燥である
   「教室内の雰囲気」（「笑い」の頻度）

これらをもとに授業の観察記録を分析し，それぞれのカテゴリーについて頻度が高い場合そこに入試の影響が見られる，と仮定した。

表2，3に結果をまとめた。それぞれのカテゴリーにつき，上に「受験準備特別授業」，下に「通常の授業」のデータを示した。以下，初めに「受験準備特別授業」，次に「通常の授業」を考察する。

現在の入試の影響について何が読み取れるか

表2，3から入試の影響について何が読み取れるだろうか。まずはそれぞれのカテゴリーにつき「受験準備」の欄を考察してみよう。表中，入試の影響が見られる，すなわち冒頭でまとめた「入試準備教育」の特徴が比較的明らかな場合にはそれを太字で示した。

まず第一に注目したいのは，一般に述べられているような入試の好ましからぬ影響はそれほど大きくない，ということである。すなわち，冒頭にまとめたような「受験技術を教える」「文法訳読に偏る」など，は必ずしも受験準備教育の特徴を言い表わしてはいない。これは各授業のさまざまな側面について見受けられる。例を見よう。文法用語は TB（1分間につき0.97回）を除きあまり使われていない。受験準備の授業である

表2：各クラスの授業内容

高校		HA		HB	HC		合計
クラス		TA	TB	TC	TE	TF	
1. 受験技術（試験への言及）							
受験準備		**14(.18)**	2(.03)	1(.02)	1(.02)0	18(.06)	
通常		**0(0)**	1(.02)	0(0)	0(0)	2(.04)	3(.01)
2. 文法訳読 (1) 文法用語の使用							
受験準備		8(.10)	**65(.97)**	5(.06)	7(.15)	5(.10)	90(.28)
通常		22(.22)	**22(.39)**	0(0)	68(1.45)	1(.02)	113(.34)
2. 文法訳読 (2) 翻訳の頻度（句，節，文）							
受験準備		**47(.59)**	13(.19)	15(.19)	**19(.4)**	3(.06)	130(.40)
通常		53(.67)	12(.21)	0	**10(.21)**	9(.18)	84(.25)
3. 形式の重視 (1) 生徒の発話へのフィードバック							
受験準備		0	**2(.03)**	0	1(.02)	0	3(.01)
通常		2(.03)	**1(.02)**	0	0	0	3(.01)
3. 形式の重視 (2) 英語についての説明							
受験準備		**20(.25)**	**39(.58)**	2(.23)	8(.17)	4(.08)	73(.23)
通常		**16(.20)**	**24(.42)**	0	43(.91)	0	83(.25)
4. 英語の音声的側面 (1) リスニング							
受験準備		**0**	**0**	48(60%)	**0**	**0**	48(15%)
通常		0	0	0	0	**22(46%)**	22(7%)
4. 英語の音声的側面 (2) 英語での発話機械的練習（合計）							
受験準備		43(.54)	94(1.40)	102(1.28)	73(1.55)	27(.56)	339(1.06)
通常		93(1.18)	123(2.16)	182(1.86)	90(1.91)	39(.78)	527(1.59)
5. 使用言語 実際の情報伝達に使われた言語（合計）							
受験準備	日	**103(90%)**	**76(84%)**	9(12%)	**79(72%)**	**39(93%)**	306(70%)
	英	**12(10%)**	**15(16%)**	69(88%)	**31(28%)**	**3(7%)**	130(30%)
通常	日	90(98%)	**40(60%)**	**0(0%)**	97(73%)	35(90%)	262(62%)
	英	2(2%)	**27(40%)**	**90(100%)**	36(27%)	4(10%)	159(38%)
7. 雰囲気「笑い」							
受験準備		16(.20)	0(0)	16(.2)	12(.26)	9(.19)	53(.17)
通常		9(.11)	0(0)	**27(.28)**	1(.02)	10(.2)	47(.14)

注：数値は頻度を表わす。カッコ内は1分間ごとの頻度。ただし，「4.(1)リスニング」については練習が行われた長さを「分」で表わす。カッコ内は全体の授業時間に占める割合（%）。また「5.使用言語」についてのカッコ内は日本語，英語それぞれの割合。

にもかかわらず，むしろ，意識的に避けられているような印象さえうける。受験と言えば必ずといってよいほど引き合いに出される「訳読」（私は一般にいわれるようにこれが全く無用な方法とは思わない）にしてもその頻度はかなり低い——多くて TE の１分間につき0.4回である。また，「笑い」の数も多く，必ずしも「無味乾燥」な授業が行われているわけではない。

第二に，授業のどの側面にどのくらい入試の影響が見られるかについては教師の個人差が大きいということである。TC, TE, TF には入試の影響はごくわずかしか見られない。一方 TA と TB は比較的多く影響を受けている。例えば，TA クラスでは他のクラスに比べ確かに次の特徴が見られた。すなわち，１）受験技術が教えられ（１分間に0.18回），２）翻訳が行われ（１分間に0.59回），３）英語の形式的側面に説明が頻繁に行われ（１分間に0.25回），４）英語の音声的側面が軽視され，５）日本語の占める割合が多かった（英語を含めた全体の発話量中90%）。

したがって，データの示すところ，１）入試の影響はすべての先生の授業のすべての側面に一様に及ぶわけではない。２）先生の個人差が大きく，ある先生のある特定の部分にのみ関係する。

入試がなければどうなるか

入試から英語がなくなるとどうなるのかをシミュレートする，というのが本稿の目的であった。それには同じ先生の入試とは無関係の授業を観察し，同じ項目について，入試向けの授業と比較してみるのがよい。すなわち，「入試を目的としているかいないか」ただそれだけの点で異なっている授業を観察し結果を比較するのである。そのため，本調査では同じ先生の文部省検定教科書に基づいた通常の授業を観察した。もちろん，通常の授業がすでに入試の影響を受けている可能性もある。しかし，観察の時期が６，７月で入試までに間があること，先生方にうかがっても「通常の授業では必ずしも入試を意識していない，意識するのは早くとも夏休み以降である」とのことで，入試からは自由な立場での授業を観察できると判断した。

表２，３「通常」の欄を考察してみよう。全体の傾向として「入試準備向けの授業」の特徴は「通常の授業」の特徴と大きく異ならない。通常の授業がすでに入試の影響を受けている可能性も極めて低い。というのも，通常授業でしかも世間で言われているような特徴をもった授業もまた少ないからである。「受験技術」にほとんど触れられていないのはもちろんのこと，文法訳読法などについても入試準備授業で頻度が少ない場合，すでに通常の授業でも少ない。

次に，前節で行った「受験準備」の分析の結果，入試の特徴が見受けられた部分について比較考察してみよう。「受験準備教育」の影響が検証され，その影響が「通常」の授業では減少する傾向にある部分を太字にし，さらに下線を施した。また，受験準備授業の考察だけからははっきりしなかったが，通常クラスとの比較を行って新たに影響の減少が見られた部分は波線で示した。

表２，３が示す通り，入試の好ましくない影響は必ずしも大幅に減少しているわけではない。TA の場合，先に挙げた５項目のうちわずか２項目について減少傾向が見られたにすぎない。

その他の先生の結果に目を移してみよう。前節の分析からは明らかではなかったが，「音声英語の使用量」（「４　英語の音声的側面(2)」）についてはすべての先生のクラスについて増加傾向にある。これは「入試に英語が

表３：授業形態

高校	HA		HB	HC		合　計
クラス	TA	TB	TC	TE	TF	
講義形式						
受験準備	51(64)	**56(84)**	26(33)	**47(100)**	**28(59)**	208(65)
通常	57(73)	**38(67)**	73(75)	47(100)	**24(50)**	239(72)
ペアワーク						
受験準備	1(1)	**0(0)**	3(4)	**0(0)**	**0(0)**	4(1)
通常	12(15)	0(0)	5(5)	0(0)	**2(5)**	19(6)
グループワーク						
受験準備	0(0)	**0(0)**	0(0)	**0(0)**	**0(0)**	0(0)
通常	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
生徒の口頭発表						
受験準備	0(0)	**0(0)**	3(4)	**0(0)**	**0(0)**	3(0)
通常	0(0)	0(0)	20(20)	0(0)	0(0)	20(6)
個人の作業						
受験準備	27(34)	**11(16)**	48(60)	**0(0)**	**20(42)**	106(33)
通常	10(13)	**19(33)**	0(0)	0(0)	**22(46)**	51(15)

注：数値は継続時間（分）。カッコ内は全体の授業時間に占める割合（%）。

なければ英語の音声的側面に関する練習は増加する」傾向を示していると解釈できる。しかし，ここでは，先にカテゴリー4(2)で記したように，オーラル・コミュニケーションの「機械的練習」に限られている。英語が「本当の（お互いにとって全く新しい）情報伝達」の手段として使われたわけではない。

また，「5　使用言語」に関して注目すべきは，TBとTCに関して「実際にコミュニケーション（未知の情報伝達の手段として）英語を使った頻度」が増加している点である。確かに，この二人の先生については入試から英語がなくなると，日本語が減り，逆に英語を実際に使う量が増える，と予測できる。しかし，TCは「入試準備授業」からしてすでに他の先生に比べてはるかに多く英語を使っていたことに注目したい。

しかし，これらとは逆の現象が観察されたことにも注目したい。まず，TFでは「通常」の授業で「リスニング教材」が使われていた。しかし，この教材は東大の過去の問題であった。この先生は「生徒のレベルにあっているので，時々通常の授業で入試の準備とは無関係に英語力を高めるために使っている」とのことであった。したがってこれは「入試の良い影響」といえる。同様の現象が他にも随所に見られる。例えば，TEでは「文法用語」の使用頻度，「英語の形式の説明」の頻度がいずれも「通常授業」で増加していた。したがって，この先生の場合これらの項目については入試とは全く無関係である，と言える。またはTAは「実際の情報伝達に使われた」英語の量が「通常」よりも「受験準備」で多い傾向があった。これは入試だからこそ英語を使う量が増したとも解釈できる。

表4：受験準備授業と通常の授業の比較

高校	HA		HB	HC	
クラス	TA	TB	TC	TE	TF
1.　受験技術		■	■	■	■
2.　文法訳読(1)文法用語	■		■	■	■
2.　文法訳読(2)翻訳	■	■	■		
3.　形式(1)フィードバック		■	■	■	■
3.　形式(2)英語についての説明			■		■
4.　音声英語(1)リスニング	■	■	■	■	■
4.　音声英語(2)口頭練習					
5.　日本語使用	■	■	■	■	■
6.　授業形態	■	■	■	■	■
7.　雰囲気	■	■		■	■

注：黒塗りの部分は入試から英語をなくしても向上しない，あるいはかえって悪くなる，と予測されるケース。

以上から得られる結論は次の通りである。1）授業に入試の影響が見られる場合には入試から英語をはずすと改善されるかもしれない。しかし，2）その入試の好ましくない影響は極めて限られているので，入試から英語をはずして得られる効果はそれほど大きくない。3）入試から英語をはずすと，むしろ入試の好ましい影響まで消える。

授業観察のまとめ

これまでの結果を表4にまとめた。黒塗りの部分は入試から英語をなくしても向上しない，または悪くなる，と予測されるケースである。今回10項目について5クラスで考察した。改善の可能性があるのは，概算ではあるが50のうち13についてのみ，おおよそ4分の1にすぎず，残りのおおよそ75%については改善されるどころか改悪になるかもしれない。

さらにその4分の1のケースについて疑問なのは，入試の好ましくないとされる影響がみられた場合ですらも，入試準備教育は必ずこのような特徴をもたなければならないのだろうか，ということである。例えば，「音声英語（口頭練習）」についてはどのクラスでも通常のクラスでのほうが多く行われていた。しかし，入試準備特別授業でこの側面の練習が「できない」というはっきりとした理由はないのである。

受験生はどうなるか

以上で考察したのは主に「教師の授業方法」であった。しかし，入試から英語をはずすことによって受験生の学習方法，態度，能力等は変わるであろうか。例えば，より実用的な英語を学ぼうとするようになるのであろうか。あるいは動機が弱まるのだろうか。冒頭に述べた通り，この方面については実証研究があまりにも乏しい。本稿の目的は授業研究に基づくシミュレーションということであるから，この側面の予測はさしひかえたい。しかし，その限られた研究の示す範囲に限って簡単に述べれば「入試をなくしても今よりよくなることはないであろう」ということである。それは主に「動機づけ」と「学習ストラテジー」に関する研究報告に基づく。

まず第一にAllport（1937）は‘functional autonomy（機能的自立）’

という概念を用いて,「何かを手段としてやっているうちにそこに本当の喜び，楽しみを見つけ出す（すなわち機能が自立する）可能性がある」と論じている。入試英語に関して言えば,「入試のために英語を勉強しているうちに英語が好きになった」ということもありうる。ESL/EFL の分野では，Gardener & MacIntyre (1991) は，その名も "An instrumental motivation in language study: Who says it isn't effective?" という論文の中で，「これまで言われてきたように 'integrative motivation'（目標言語が使われている文化を習得すべくその言語を学ぶという動機）をもった学習者が必ずしも優位な立場にあるわけではない。'instrumental motivation'（単なる手段として報酬を得るために外国語を学ぶ動機）でも外国語習得の助けになる」という内容の報告を行っている。入試の道具として英語を勉強していても，それがやがては「自立する」ということもありうる。自立するか否かは入試を終えた後，すなわち大学での学習，そしてそれを助ける教育次第ということになるのではないだろうか。（ただし,私の現在行っている調査の示すところによると，この問題はかなり複雑である。受験生の英語学習に対する動機づけの強さは試験の難しさによって変わるようである。例えば，あまりに難しすぎる場合には準備しないし，逆にあまりに易しすぎる場合にも準備しない，という傾向が観察された。）

第二に,「学習ストラテジー」と入試の関係についての調査が示すところでは，入試を経てきた学生はそうでない学生（推薦入学者）よりもはるかに多様なストラテジーを使用する傾向がある。さらに，この中には「英語のラジオ放送を聞く，新聞を読む」など，英語を実際に使って学ぶ方法も含まれていたのである。英語に興味をもっている生徒は，入試があろうとなかろうと，さまざまなストラテジーを試し，そして英語力の向上をはかっているのである（Watanabe, 1992参照)。

もちろん，これらはさらに実証研究を続けデータを集め，検証しなければならない事項であることは言うまでもない。しかし，これまでのところ「入試から英語をはずす」ことによって英語学習がよくなる，という報告はほとんどないのである。

おわりに

本稿では，入試から英語をはずすことによって教育はどうかわるか，あるいは変わらないか，を予測した。これまでに得られた実証研究の結果が示す限りでは，入試から英語をはずしても期待したほどの益はなさそうである。

入試から英語をはずすか否か，それを議論する前に，私たちは英語教育をどうしたいのか具体的なシナリオをつくる必要がある。そして，そこでは入試がどのような障害となっているのか，どれだけ実証的な根拠があるのか，を検証すべきである。さもなければ，たとえ入試から英語をはずしたとしても，それは問題の解決にはならないのではないだろうか。入試はその姿を変え，「試験」（例えば，卒業試験，資格試験，等々）の名のもとに教育の随所に現れるであろう。私たちに必要なのは事実，客観的な情報に基づいた判断であって，人がどう思うかという意見ではない。最も望ましくないのは，全てを入試のせいにして，入試をなくせばすべては良くなるといった幻想を描き続けることである。

以上では，入試の影響が，なぜある先生のある授業の側面にのみ存在するのかについては述べなかった。これについて詳しくは稿を改めて論じることとしたい（ただし，Watanabe (1996a)，および (in press a) を参照のこと)。

（国際基督教大学講師）

◆参考文献◆

Allport, G. (1937). The functional autonomy of motives. *The American Journal of Psychology*, 50, 141-156.

Gardner, R. C., & P. D. MacIntyre. (1991). An instrumental motivation in language study: who says it isn't effective? *Studies in Second Language Acquisition*. 13, 57-72.

Watanabe, Y. (1992). Washback Effects of a College Entrance Examination on Language Learning Strategies. *JACET Bulletin* 23, 175-194.

———. (1996a). Does Grammar Translation Come from the Entrance Examination? *Language Testing*, 13/3, 318-333.

———. (1996b). Investigating Washback in Japanese EFL classrooms. *Australian Review of Applied Linguistics*, Series S, 208-239.

———. (in press a).「入試が悪いと言う前に——入試英語を生かすための授業に向けての提案」*ASTE Newsletter*.

———. (in press b). Constructing a classroom observation scheme for the test impact research. *Sophia Linguistica*, 41.